

はスピリチュアリティと呼ばれる領域では、その“Do it your-self”や“Back to nature”といった精神が着目されることが多い。しかし、各種テクノロジーとの融合を標榜する集団もまた、連綿と存在していることが指摘出来るだろう。今日、リックライダーらがインターネットに求めた「共通の関心に基づくコミュニティ」の構築は実現している。そのコミュニティの凝集性は伝統宗教のそれに較べるべくもないかも知れないが、宗教の周縁に位置する人々を緩慢に取り込むだけのインフラを備えていると言えよう。それが宗教実践を行う環境となるかは未知数であるが、現実地理的な空間とCMC空間との境界が融解しつつある現在、注目すべき対象と言い得るだろう。

宗教の社会貢献の領域と形態

稲場 圭 信

宗教の社会貢献には長い歴史がある。日本においては、古代には、皇族、地方官吏、豪族などによる弱者への救済活動があったが、仏教を基盤とした救済活動も存在した。身寄りのない貧窮の病人や孤老を収容する救護施設として聖徳太子や光明皇后が設けた悲田院や施薬院が仏教の慈悲をもとにした慈善事業として知られている。奈良時代の行基の公共事業も有名である。中世では、永観をはじめとする平安末期の浄土教の聖たちの社会奉仕活動があった。近代における慈善事業は、感化救済

事業を経て近代社会事業へと発展した(一八八〇年、YMCA 日本で設立、一八八七年、キリスト者石井十次が岡山孤児院を設立、一八九七年片山潜が東京にキングスレー館を設立しセツルメント運動、一九二〇年、賀川豊彦が生活協同組合を設立)。このように、宗教は確かに社会に貢献している。その内容は、災害時救援活動、発展途上国支援活動、平和運動、環境への取り組み、地域での奉仕活動、医療・福祉活動、教育・文化振興など非常に多岐にわたる。しかし、宗教の社会貢献は、直接的に目に見える社会的実用性のみから問われるものではない。人間として生き方、社会のあり方を根本から問い直したり、思いやりの精神を滋養したりすることも宗教の社会的役割であり、社会貢献ではないか。

そこで、私は、「宗教の社会貢献」を「宗教者、宗教団体、あるいは宗教と関連する文化や思想などが、社会の様々な領域における問題の解決に寄与したり、人々の生活の質の維持・向上に寄与したりすること」とゆるやかに定義している。

宗教の社会貢献の領域に関しては、この一〇年ほどの研究、さらには、日本経団連による企業の社会貢献活動の領域なども参照しながら、以下の八つ、すなわち、①緊急災害時救援活動、②発展途上国支援活動、③人権・多文化共生・平和運動・宗教間対話、④環境への取り組み、⑤地域での奉仕活動、⑥医療・福祉活動、⑦教育・文化振興・人材育成、⑧宗教的儀礼・行為・救済、に分類している(稲場圭信・櫻井義秀編著『社会貢献する宗教』世界思想社、二〇〇九)。さらに、①社会教育活動、②社会奉仕活動、③社会事業活動(猪瀬優理、稲場・櫻

井前掲書所収)や、①サービス系、②アクティビズム系、③ダイアログ系(大谷栄一、稲場・櫻井前掲書所収)に大きく三分類することも有効と思われる。

社会貢献の形態としては、企業の場合、①寄付、②自主プログラム、③従業員の社会参加支援の分類が一般的である。この活動主体による形態の分類に、活動場所、活動頻度、活動対象をいれて、包括的に、宗教団体による社会貢献活動の形態を整理すると以下のようなになる。①場所：教団施設内／教団施設外、②頻度：継続／要請に応じて／緊急災害時、③主体：教団／外部組織と共同／外部組織を支援(資金的援助)、④対象：教団内の人／教団外の人／社会一般。

ピエール・ブルデューは、かつて「学者が伝統的に自己に課してきた慎みから脱却すべきではないでしょうか」、「社会参加型の知を生み出すためには、実際には学問性の規則に従って自律的に研究しなければなりません。社会参加を伴う学問性であるべきなのです」と語った(「研究者の社会参加に向けて」『ル・モンド・ディプロマティーク』二〇〇二年二月号)。宗教の社会貢献活動研究も、社会参加を伴う学問性でありたい。そして、その社会参加のあり方は多様でありたい。

「宗教の社会貢献活動研究プロジェクト」(<http://keishin.way-nifty.com/scar/>)

社会的宗教と他界的宗教への序章

——ケン・ウィルバー論から——

津城寛文

宗教学も、他の諸学と同様、さまざまな下位分野に分かれて、それぞれの個別研究が行なわれている。研究環境の風通しを良くするには、研究方法も対象も様々であることを確認するのが有効である。このような自他の反省を高めるためには、できるだけ多様なビジョンを、作業の出発点に組み込んでおく必要がある、後期・ウィルバーの四象限図は、そのための有力な一つになり得る。

ウィルバーの四象限図には、近現代(一部、古代)の著名な思想や学説が、それぞれ限定された射程でもっぱら有効であることが図示されており、縦軸の上方向を「個人的」、下方向を「集団的」、横軸の左側を「内面」「解釈(学的)」「意識」、右側を「外面」「独自の」「経験的、実証的」「形式」、と指示している。

宗教研究の射程確認のために、このような見方がどう有効なのか、例としてベラー批判を見ると、ベラーは、「左下象限とその主要な二つのレベル、そして各レベルでの主要な二つのタイプに焦点を合わせている」と位置付けられる。

「構造としての神」の第七章、「今日の宗教社会学」の要点は、「本格的な宗教」と「合法的な宗教」の区別があり、多くの宗